

## がん患者遺族の家族機能の変容プロセス

—家族成員の情緒的安定に焦点をあてて—

鶴田 裕子

### 問題と目的

柳原(1998)は、患者にとっての支援源であり、自らもまた被支援者でもあるという矛盾した立場に置かれたがん患者家族に生起する感情の揺れを指摘している。家族はこうした感情の揺れを生じさせながらも、自身の気持ちを一定に維持しようとする動きも同時に起こしていくが(柴田他, 2011)、家族成員がどのように感情の揺れに対処しているか詳細に検討した研究はみられない。加えて、坂口・柏木・恒藤(1999)は、適応的な家族は精神的健康に対し直接的効果を及ぼすのではなく、患者との死別という危機状態を緩和する間接的な効果を持っていることを示唆しながらも、尺度によって測定された家族機能が実際の家族機能とは必ずしも一致しない可能性を指摘している。よって、本研究では、親をがんで亡くした成人に焦点を当て、(1)患者の死に際して家族成員の情緒的安定と情緒的揺れにどのような要因が影響しているかについて検討するとともに、(2)患者の死を予期したときから現在に至るまでの子の視点から見た家族機能の変容プロセスについて検討することによって、がん終末期から患者との死別後に至るまでの家族に対するケアの在り方への示唆を得ることを目的とする。

### 方法

がんで親を亡くした経験のある成人のうち、10名の40代～60代を調査対象とした。精神健康調査票(以下GHQと表記する)に回答を求め、患者のがんが分かってから死別後の現在に至るまでの情緒的安定および揺れの要因、また家族機能の変化について半構造化面接によるインタビュー調査を行った。インタビューの際、患者のがんがわかってから死別後の現在に至るまでの気持ちの推移についてグラフへの記入を求めた。調査対象者のうち1名を分析対象から除外し、9名の発話データについて修正版グランデット・セオリー・アプローチ(木下, 2003)による分析を行った。分析テーマは「家族の中での役割意識による情緒的安定の変容プロセス」「家族機能の変容プロセス」とそれぞれ設定し、分析焦点者は「中年期以降の成人のうち、親をがんで亡くした経験のある者」と設定した。また、GHQ得点、グラフ、およびインタビューでの語りを基準として、気持ちの推移の振れ幅が小さかった者を安定群、推移の振れ幅が大きかった者を不安定群として群分けを行い、両群に共通するカテ

グリーおよび異なるカテゴリーの検討を行った。

### 結果

「家族の中での役割意識による情緒的安定の変容プロセス」を分析テーマとした結果、9つの概念と4つのカテゴリーが得られた。それらのカテゴリーをもとに、Figure 1のようなストーリーラインが抽出された。ストーリーラインから、【家族の中心は自分だという意識】を持つ家族成員は、〈自分の内側からの影響〉を情緒的安定の要因として活用することが示された。一方で、【家族の中心は自分以外の家族成員だという意識】を持つ家族成員は、情緒的安定および揺れの要因のどちらにも一貫して〈外の状況からの影響〉を活用することが示された。また、「家族機能の調整プロセス」を分析テーマとした結果、10の概念と2つのサブカテゴリー、3つのカテゴリーが得られた。それらのカテゴリーをもとに、Figure 2のようなストーリーラインが抽出された。ストーリーラインから、《患者の死を予期》するという危機に際し、中年期の子からの視点において、〈家族の乱れ〉や〈家族の補償〉をする動きが認識されていることが確認された。加えて、群分けの結果、【家族の中心は自分だという意識】を持つ家族成員は安定群、【家族の中心は自分以外の家族成員だという意識】を持つ家族成員は不安定群に属していた。

### 考察

家族成員の情緒的揺れには、家族の中での役割意識による違いがみられることが明らかとなった。【家族の中心は自分だという意識】を持つ家族成員は、情緒的揺れの表明が少ない状態にあることが示された。一方、【家族の中心は自分以外の家族成員だという意識】を持つ家族成員は、【家族の中心は自分だという意識】を持つ家族成員と比べるとより情緒的揺れを表明しやすい状態にあった。こうした差異の背景には、役割意識によって日頃から培われた家族内の問題への対処法が患者との死別という危機においても関連していることが予測された。また、どの調査対象者も一様に情緒的安定を取り戻しており、個人の安定の背景にはFigure 2によって示された家族機能の変容プロセスが関連していることが推測された。

今回の調査における役割意識とは、家族内における役

がん患者遺族の家族機能の変容プロセス

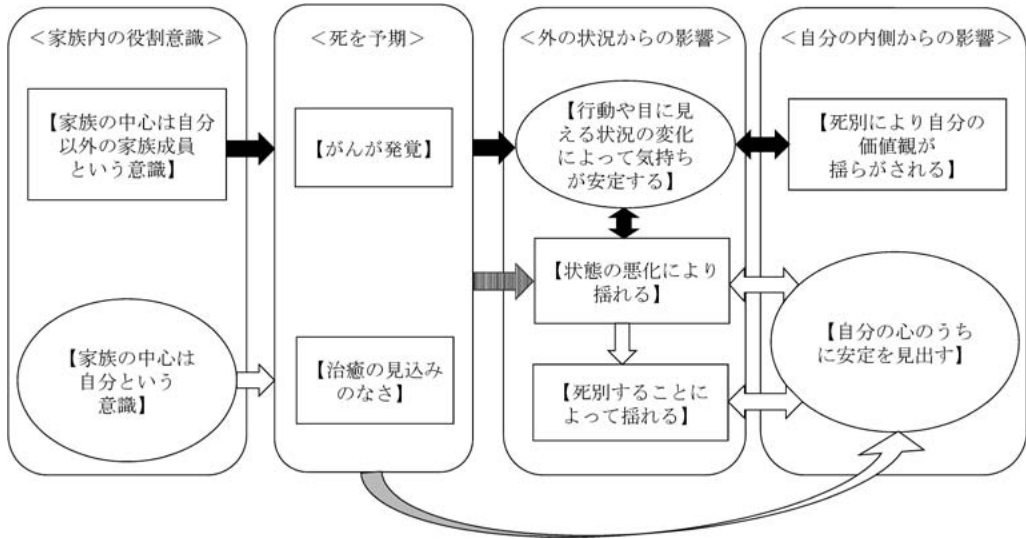


Figure 1 家族の中での役割意識による情緒的安定の変容プロセス

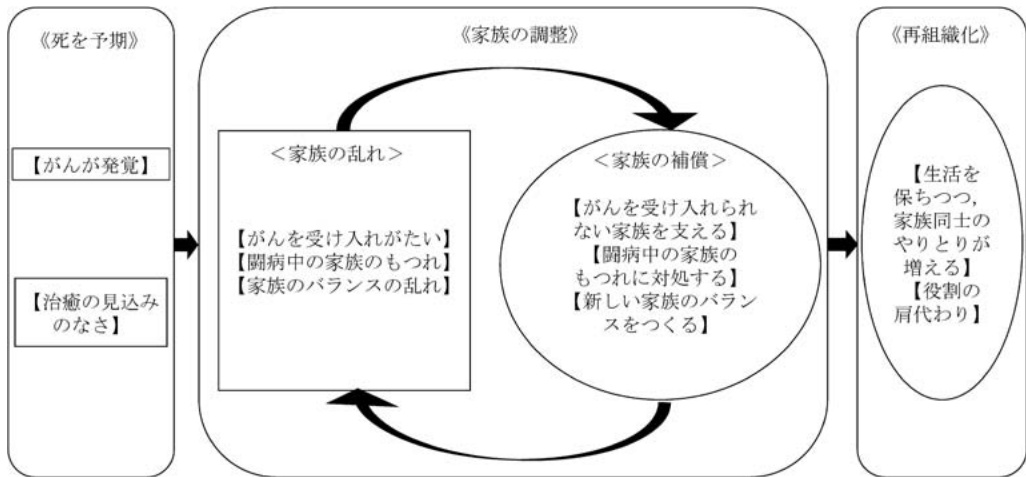


Figure 2 家族機能の調整プロセス

割認知を指したものであると考えられる。家族内において、問題対処の中心的な役割を期待されている家族成員は、それに見合う役割行動を生じさせることによって、自らが中心的な役割を担う者だという認知を持つようになると推測される。役割認知と役割行動は相互に関連のあるものであり、がん患者家族および遺族に対するケアについて検討する際、家族成員が家族内でどのような役割認知を持ち、どのような役割行動を起こしているかといったことを念頭に置いたかかわりが必要だと考えられる。

課題と展望

本研究から、家族成員の役割意識による情緒的揺れの表明における違いが示されたが、日常的な家族の問題対処場面においてもこうした違いがあるのか、あるいは終末期という強く表示規則が存在することが想定される場面特有のものであるのかについて、量的な調査をもとに検討する必要があると考えられる。また、今回家族機能について検討を行ったが、あくまで子の視点にとどまった調査となったため、今後、直接観察や一家族につき複数の家族成員に調査を行うことによって、家族全体の動きについて精緻化する必要がある。